

後期弥生土器に見られる地域性について

～出雲市内出土土器を中心に～

はじめに

近年、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は頻繁に行われ、多くの貴重な遺跡、遺物が発見されている。出雲市も例外ではなく、白枝荒神遺跡、下古志遺跡などの調査により、出雲平野の古代の様相が少しずつ解明されつつある。

山陰には弥生時代後期頃からいわゆる「山陰系土器」といわれる独特の形をした土器が作られ、山陰の弥生時代から古墳時代にかけての時代区分を行うにあたっての、重要な指標として研究が進められているが、形式編年も統一されていない状況にある。これは出雲地方という狭い地域のなかでも場所によって形が微妙に違う、地域性があるのではないかという指摘がなされているものの、現在のところ、地域性について触れられた研究は少ない。

そこで、今回は出雲市で出土している多くの後期山陰系土器の中でも、特に数多く出土している甕形土器を取り上げ、斐伊川流域の他の地域の土器と比較することによって、地域性の有無を確認したい。

ただし、墳墓への供献土器は他地域で作られて運ばれた可能性もあるため、今回は西谷墳墓群などの埋葬施設に伴う資料は対象とはしない。

1. 編年試案

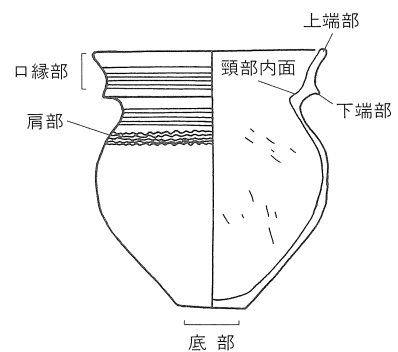
出雲市内の遺跡で出土している甕形土器を用いて、簡単な編年を行う。ただし、大枠については従来の研究成果に基づく。また、文中で用いる部分名称については図1の通りである。

(1 期) 口縁部は短く厚みがあり、端部はほとんど下には延びない。外面に多少幅のある凹線が施されている。器壁も厚く口縁部内部はミガキで仕上げられることが多く、まれにナデ仕上げである。最大径は全体のほぼ1/2に位置する。底部については残存していることが少ないためはっきりしないが、おそらく平底であったろうと思われる。

(2-1期) 口縁部は1期より薄く仕上げられ、内面はナデで仕上げられることが多い。外面には1期よりも細く、細かい平行沈線が施される。口縁端部は多少下へ延びる傾向にある。器壁は1期よりも薄い。最大径は全体のほぼ1/2、またはそれより上にくる。底部は平底、または平底のなごりがある程度である。

(2-2期) 器形は2-1期と大きな変化はないが、口縁部外面の平行沈線が1部ナデ消される傾向がみられる。これは口縁部の内面をナデで仕上げる際に外面部分も消されてしまうものと思われる。

器形に変化は無いものの、口縁部外面に平行沈線を施文する時期から、無文のナデ仕上げに移行す



第1図 各部分名称

る過渡期であると考えため、あえて2期を細分するものである。

(3 期) 口縁部外面に文様が施されなくなり、内外面とも完全にナデ仕上げである。口縁上端部が鋭くなる。下端部は下に延びていたものが、次第に短くなる。最大径は全体の1/2より上にくるようになり、やや倒卵形に近づく。底部は先端が尖り気味であるが、完全な丸底である。

(4 期) 口縁上端部が丸く仕上げられる。下端部は横方向に隆起するようになる(側隆)。器形は完全な倒卵形になり、底部は先の細い丸底である。

(5 期) 口縁上端部は平らな面を持つようになり、下端部の側隆は鋭くなる。最大径が下がって全体のほぼ1/2あたりに位置し、尖り気味だった底部が丸みを帯びてくる。

(6 期) 口縁上端部はさらに広い面を持ち、横方向へ延びる傾向にある。最大径は全体のほぼ1/2に位置し、底部はほぼ完全な丸底になる。

以上の編年案を示したものが表1である。これをもとに出雲平野出土の遺物とその他の地域の遺物の比較検討を行いたい。

2. 地域間の比較

地域性を比較するため、これまで違いがあるではないかといわれてきた出雲平野(斐伊川下流域)、斐伊川上流域、松江(意宇平野)の3地域に区分し、それぞれの資料を取り上げる。資料の出土遺跡は以下の通りである。

なお、中流域にあたる木次・三刀屋町付近では殆ど資料が確認できなかったため、今回は取り上げず、加茂町神原正面北遺跡出土遺物を参考資料として用いたい。

● 出雲平野(斐伊川下流域) 天神遺跡 古志本郷遺跡 下古志遺跡 白枝荒神遺跡

山持川川岸遺跡

● 斐伊川上流域 日焼田遺跡 追谷遺跡 渋谷遺跡 下大仙子遺跡 角田遺跡

芝原遺跡 須坂4号墳(古墳の下から住居跡がでており、ここで取り上げる土器は古墳ではなく住居跡に伴うものと思われる。)

● 松江(意宇平野) 平所遺跡 タテチョウ遺跡

上流域の遺跡として挙げた日焼田、追谷両遺跡出土の土器は位置的にいわゆる山間部の土器として扱われることが多い。山間部の土器の特徴としてよく挙げられるのが、

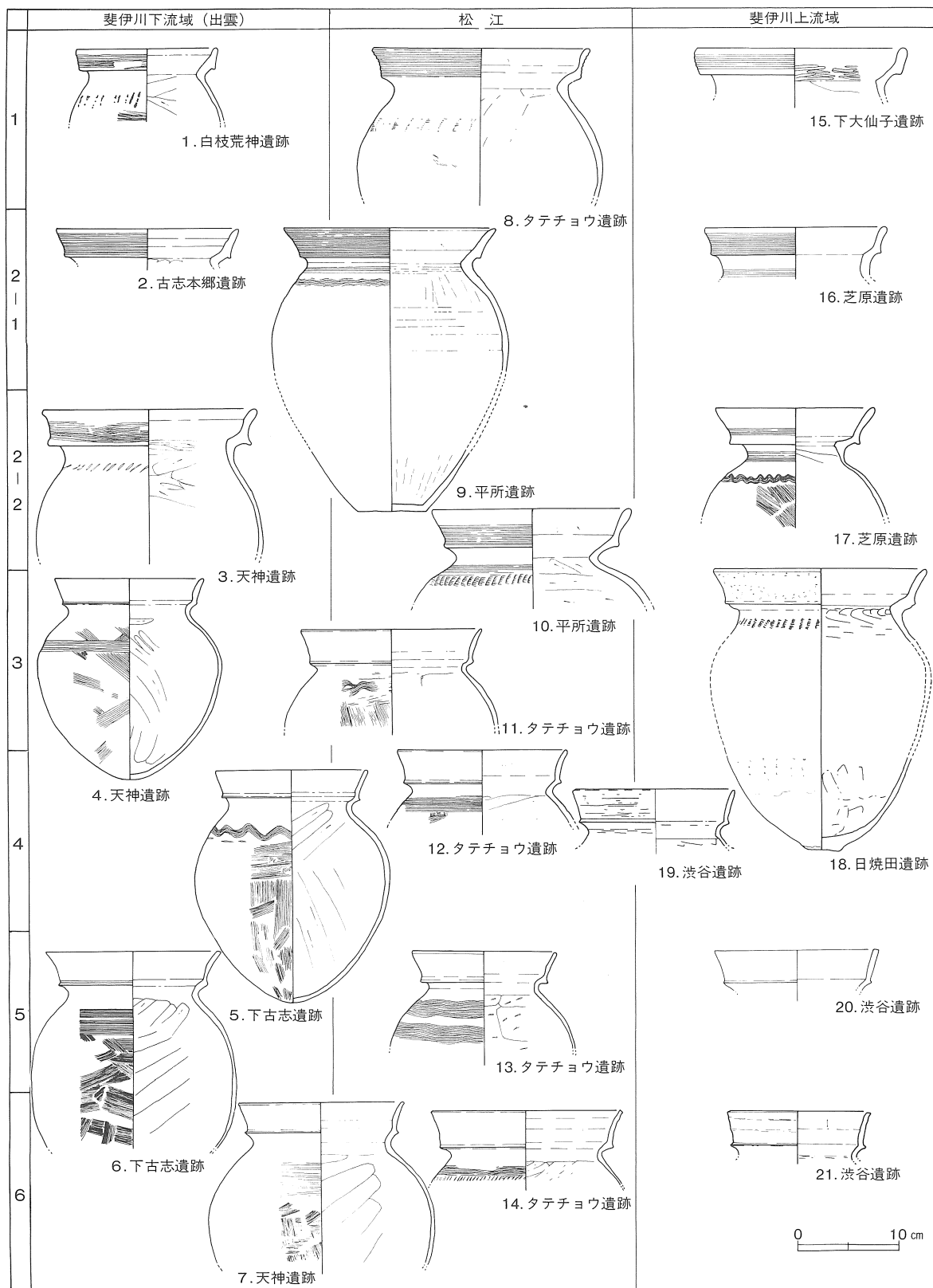
● 胎土が粗い。(砂粒を多く含む)

● 器壁が厚く、全体的に粗い作りとなっている。

の2点が主にいわれている。

この特徴は、いわば見た目に頼ったものであり、見る人によって個人差が現れやすいものである。また、松江と出雲という近距離の地域間の出土土器についても、「地域によって違いがあるのではないか」といわれてはいるものの、どの部分に明確な違いがあるのか、ということとははっきりとは指摘されていない。

そこで、上記の3地域間での相違点が本当に存在するのかどうかを確かめるための比較点を、



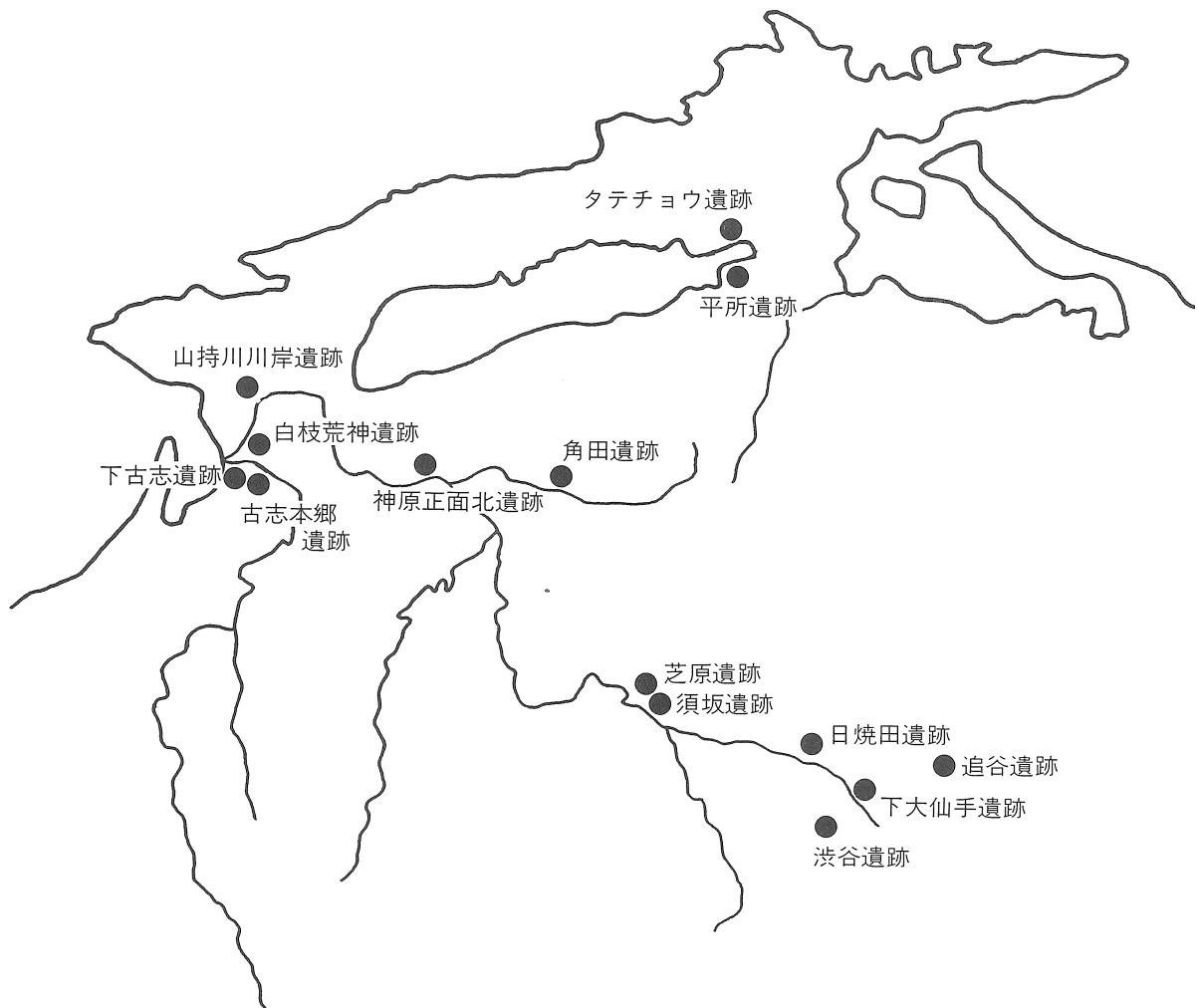
第1表 編年表

- 波状文の採用時期
- 底部の上げ底の有無
- 口縁部の拡張の有無
- 口縁下端部の形式の違い

の4点に絞りたい。

まず、波状文の採用時期について第3図をみると、斐伊川上流域では2－1期から口縁部外面に波状文が施されている。また、早くから取り入れられているだけではなく、角田遺跡17／59（29%）、日焼田遺跡10／24（42%）、下大仙子遺跡3／15（20%）、追谷遺跡1／6（17%）、芝原遺跡1／10（10%）、須坂4号墳3／10（30%）と全体的な出土数が少ないにも関わらず、必ず波状文が施文された土器が出土しており、全体の中にしめる波状文の割合が大きいといえる。

この上に肩部に施文されている分も含めると、その数はさらに増える。須坂4号墳（弥生住居跡）出土遺物のなかには、鼓形器台の外面にも波状文が施文されているものがあり、器種を問わず波状文が採用されていることが分かる。



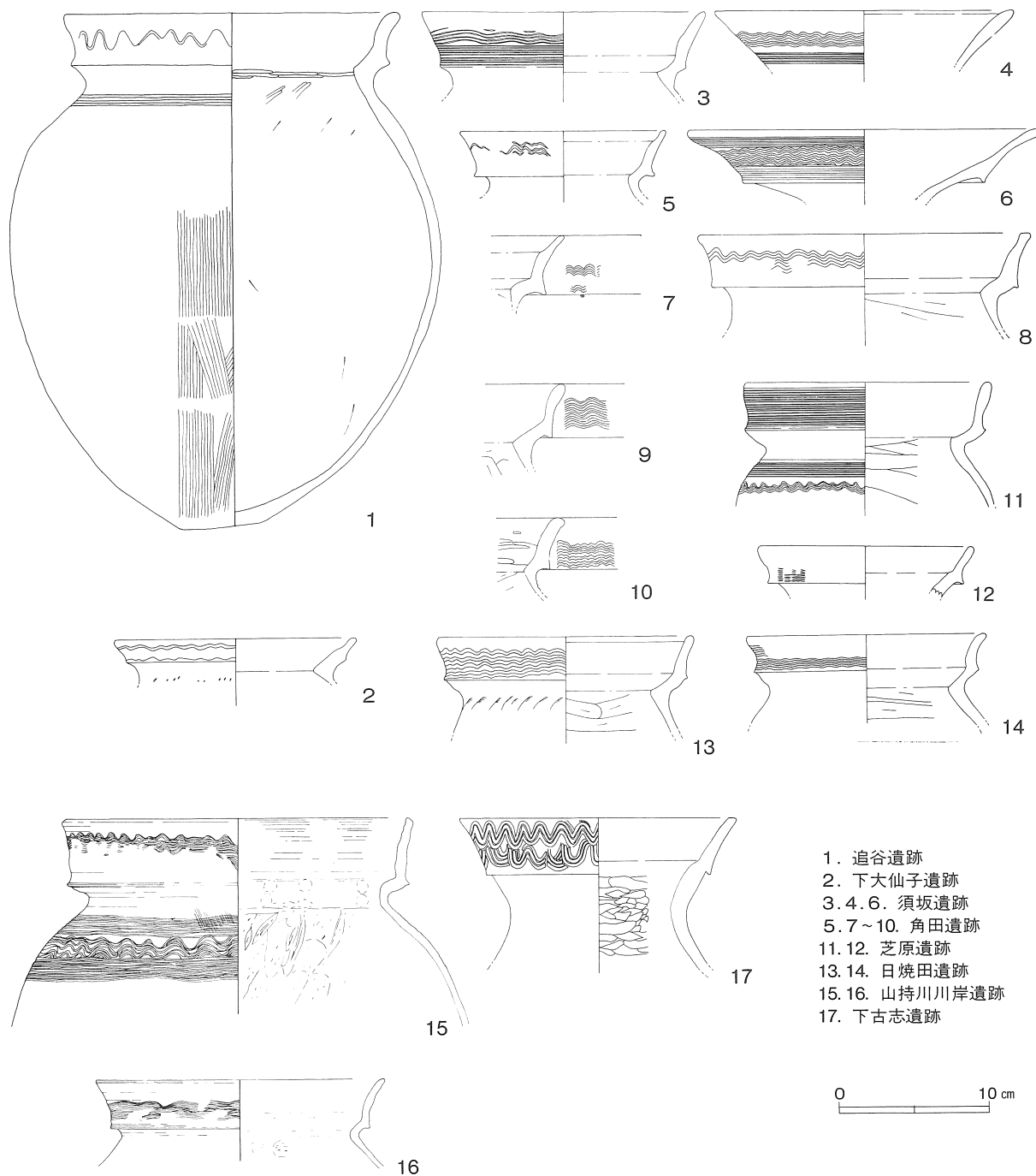
第2図 遺跡分布図

一方、出雲平野（斐伊川下流域）や松江では、波状文は3期以降肩部に施文されるものが若干見られるものの、上流域のように口縁部外面に波状文が施されているものは、山持川川岸遺跡で出土して

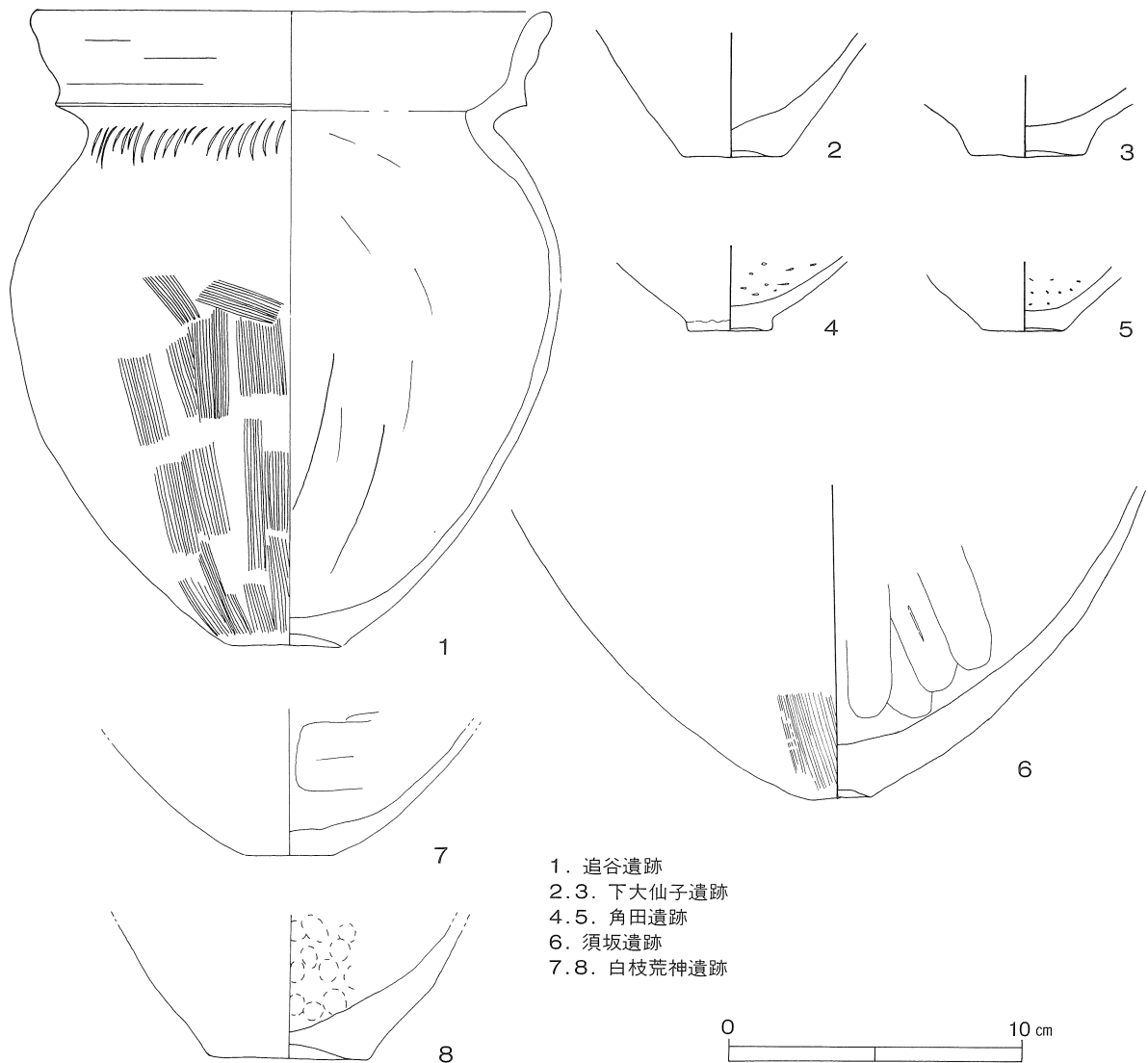
いる2点と、タテチョウ遺跡出土の壺にみられる程度で、上流域程多用されていない。

このほかの遺跡でも、同時期の土器は多数出土しているが、波状文が施文されているものは皆無であり、このことから考えても、上流域で波状文がいかに多用されていたかが窺える。

次に、底部の状態についてであるが、第4図にいくつか図示しているが、上流域では3期近くになっ



第3図 波状文のある土器



第4図 上げ底の土器

ても上げ底状に整形しているものがみられる。出雲（下流域）や松江では、3期になると平らな部分がなくなり、より丸底に近づくが、上流域では3期に入っても平底が残っているうえに上げ底状のものが多い。

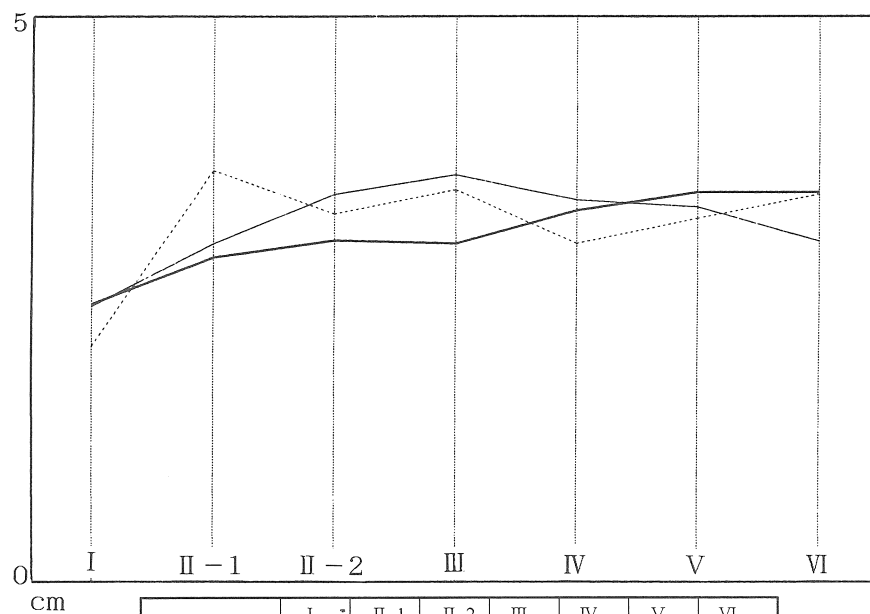
出雲（下流域）でも白枝荒神遺跡出土の底部などは上げ底状にはっきりと意図的に整形されているものが1点出土しているものの、その他のものは整形の際にくぼんだもので、上げ底を意識して作られたものではない。

上げ底状の整形は弥生時代中期頃の土器には多く見られるが、次第になくなっていくのが一般的である。上流域では、他の地域よりも長く上げ底状の整形をするという技法が残っていたものと思われる。

3点目の口縁部の拡張の有無について、いわゆる山陰系土器は従来の場式（試案では2期）といわれてきた土器の時期に口縁部が大きく拡張するといわれてきた。しかし、それはどの地域にも共通していえることなのであろうか。口縁部の幅は口径に比例して大きくなる可能性もあるので、口縁部と口径の両方を測定し、口縁部幅が口径に左右されないことを確認したうえで、時期別に平均値を出して、

3つの地域を同じ条件で比較した。(第2表)

これをみると、口縁部の幅は従来の場式と呼ばれている時期に拡張するとされ、編年の目安の1つとされてきたが、実際には各地域によって変化の仕方がまちまちであることがわかる。松江では、従来の編年の際にいわれていたように、2-1期に拡張の度合いは最高値に至り、それ以後



	I	II-1	II-2	III	IV	V	VI
上流域	2.43	2.98	3.41	3.58	3.36	3.3	3.0
下流域	2.45	2.86	3.01	2.98	3.27	3.43	3.43
松江	2.08	3.62	3.24	3.45	2.98	3.2	3.41

第2表 口縁部の拡張グラフ

は徐々に縮小し、次第に落ち着く傾向を見せている。

しかし、斐伊川上流域と下流域にはともに大きな変化は見られない。上流域は2-1期、2-2期に拡張傾向を示し、3期に最高値に至る。一方下流域はわずかながら拡張傾向を示すものの、ほぼ横這いで、3期から5期にかけてやや拡張し、4期から5期の間で上流域と逆転する。しかし、3期以降は各地域での画一化が進んだために、下流域の口縁部が拡張し、上流域のものが縮小したという見方もできるであろう。

このように、口縁部の拡張についても各地域で全く異なる傾向を示している。

第4点は口縁下端部とそこから頸部にかけての形態の違いである。口縁下端部の形態を第3表に示すように区分する。斐伊川下流域(出雲)では、1期は単純型、2-1, 2-2期は下延型がみられる。この点に関しては松江も同じ様な変化をみせている。

一方斐伊川上流域では下延型のものは少なく、どちらかという単純型をそのまま引き継いでいるものや、下端部が垂直方向にわずかに突出しているものが主で、下流域のような下延型といえるものはごくわずかである。

中には芝原遺跡出土土器(第3図11)のように水平方向に突出し、そこから頸部にかけてふくらむ(第3表、側隆B型)という形態のものも少なくない。これは3期以降のものに見られる側隆C型のような鋭さはないため、上流域のものが他地域に先駆けて変化を遂げたというよりは、独自に変化したものと思われる。

以上4点が各地域にみられる相違点である。このほか、頸部内面及び口縁部内面形状についても相違点がみられる。下流域・上流域については、2-1期～3期頃にかけて、口縁部内面の屈曲が大きく、そのため頸部内面の突出が大きく受け口のような形をしているものがみられる。これに比べ、松

江のものはそれほど口縁部内面の屈曲が大きいいため、口縁部から頸部にかけての内面の凹凸が少ないように見受けられる。しかし、屈曲の程度については数値として測定しておらず、また、量的なものについても数えたわけではないので、あくまでも現段階では比較的そういう傾向にあるのではないかという問題提起にとどまっている。

また、従来山間部の土器の特徴といわれてきた器壁の厚さ、胎土の粗さについてであるが、器壁については図面を見比べても明らかなように、両地域にほとんど差はないといってよいであろう。胎土については実見した程度では確実なことは分らないが、上流域の方が粗いなどという印象は受けず、これといった明確な違いは見られなかった。この2点については地域間に見られる相違点とは言い難い。

これらの地域間の特徴の消長をまとめ、表にしたものが第3表である。この表をもとに、ここから窺える各地域の地域性を検討する。

4. 土器にみられる地域性

各地域の当時の地域性について検討する。第3表をみると、まず、1期には3地域ともほぼ同じ特徴をもっており、明確な地域性は確認できない。つまり、いわゆる「山陰系土器」といわれる複合口縁が採用された頃は、どの地域にも同じ情報が伝わっていたといえる。しかし、2-1期に入ると、急激に地域ごとに様々な変化を見せる。

まず、松江（意宇平野）は口縁部の拡張がみられるが、斐伊川上流域、下流域（出雲）にはその傾向はみられない。さらに斐伊川上流域では口縁部外面に波状文が施されるという、他の地域にはない特徴がみられる。

この波状文については石見地方でも確認されている（羽須美村菅城遺跡、匹見町郷上遺跡など）。また鳥取県でも多く確認されている（倉吉市大山遺跡、東伯郡羽合町南谷大山遺跡など）。ただし鳥取県のものには凹線文と波状文が二重に施文されたものなど（鳥取市大桝遺跡）斐伊川上流域と異なった点があり、波状文が多く採用されているからといって、同じ地域性をもっているとはいえない。

出雲市内では下古志遺跡で口縁部に波状文が施文された壺と思われる口縁部が出土しているが、（第3図17）これは倉吉市周辺でみられるもので（中川寧氏の御教示による）、鳥取県の情報が出雲にも伝わっている証拠であるが、甕の口縁部に施文されているものは出土していない。

このように、情報が伝わっているにもかかわらず斐伊川下流域（出雲）で波状文がみられないというのは、「波状文を受け入れない」という1つの地域性であるとも考えられよう。

また、斐伊川上流域での口縁部の拡張は2-2期から3期にみられること、底部の上げ底が他の地域より遅くまで残っていることから、他の2地域が受けている影響を少し遅れて受ける、という可能性があると思われる。

この点については出土数が少ないが、上流域の日焼田遺跡、須坂3号墳出土の鼓形器台をみると、2-2期の特徴であるナデ消しがあったり3期以降の特徴がみられたりするものでも筒部が細いなど、古い様相をもっている。これは他の地域の影響を遅れて受ける、もしくは古い様相をそのまま引き継

	類 部		口 縁 下 端 部					口縁部外面		底 部	
			単純型	下延型	側隆A型	側隆B型	側隆C型	平行線	波状文		
	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松	上出松
1											
2-1											
2-2											
3											
4											
5											
6											

上…上流域 出…出雲（下流域） 松…松江

第3表 各地域の特徴 消長表

ぐ傾向がみられるということがいえるであろう。

一方、斐伊川下流域（出雲）については、2－1期、2－2期に口縁部の拡張がみられないとはいえず全体的な形は松江と大きな相違点はみられない。しかし頸部内面の鋭い稜や2－1期にみられる口縁部の大きな屈曲と頸部内面が受け口状の形を保ち続けることは、1つの地域性の現れといってよいであろう。

全体を通してみると、1期は3地域ともに同じ情報に基づき複合口縁の土器が作られている。しかし、2－1期になると、松江では口縁部の拡張、斐伊川下流域（出雲）では口縁部内面の大きな屈曲と受け口状の形態、斐伊川上流域では波状文の多用と急激に地域性の出現がみられる。

3期以降については、斐伊川上流域で口縁部の拡張幅が最大値に至る、という相違点があるものの、形、文様の面からみると3地域とも大きな違いはなく、この時期以降口縁部の幅についても均一になる傾向があることから、全体的に画一化が図られそれまで発揮されていた地域性が払拭される。

この点については、確実な裏付けをとることはできないが、少なくともこの3地域においてそれまでの地域性が奪われる、もしくは廃棄され画一化されるような文化的、もしくは政治的に大きな動きがあったと考えられる。

3期以降は古墳時代への過渡期であり、今回は敢えて墳墓の資料を取り入れなかったが、今後これらの地域性を把握した上で墳墓の資料の検討を行えば、この時期の3地域及び出雲地方の動きが解明できるきっかけとなるものと思われる。

おわりに

今回は出雲市出土の遺物を中心に地域ごとの比較検討を行うのみで、狭い地域の地域性の存在を確認することで終わってしまった。また、斐伊川上流域の遺物は器種が限られており、全体像がつかめる状態とは言い難く、甕の変化でしか地域性を掴むことが出来なかったことを残念に思う。しかし、地域性の存在を明らかにしたことで、今後その地域性がどういう影響のもとに生まれたものなのかという部分に行きつけければ幸いである。

斐伊川中流域にあたる木次町、三刀屋町などでも調査を行ったが、今回取り上げた時期の遺物はほとんど無く比較することができなかった。上・下流域で出土しているので全くないとは考えにくいいため、中間地点の地域性の状態を比較するためにも今後の遺物の増加が待たれる。

参考文献

- 弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 1992.5 正岡陸夫、松本岩雄編
- 「山陰<鍵尾式>の再検討とその併行関係」 1979 藤田憲司『考古学雑誌』第64巻
第4号
- 「山陰地域における古墳形成期の様相」 1984 房宗寿雄『島根考古学会誌』
第1集
- 「山陰古式土師器の形式学的研究－島根県内の資料を中心として－」
1987 花谷めぐむ『島根考古学会誌』
第4集

遺物実測図転載報告書

- 下大仙子遺跡 一発掘調査報告書一 1985.3 横田町教育委員会
- 角田遺跡、又下遺跡、付大東高校グラウンド遺跡他資料
1997.3 大東町教育委員会
- 須坂遺跡他 1997.3 仁多町教育委員会
- 天神遺跡第7次発掘調査報告書 1997.3 出雲市教育委員会
- 山持川川岸遺跡 1996.3 出雲市教育委員会
- 神原地区遺跡分布調査報告書 1988.3 加茂町教育委員会
- 沢田宅裏遺跡、鎗免大池遺跡、渋谷遺跡調査報告
1982 横田町教育委員会
- 日ヤケたたら跡、芝原遺跡 1994.3 仁多町教育委員会
- 角森遺跡発掘調査報告書 1994.3 松江市教育委員会
- タテチョウ遺跡 1985.3 松江市教育委員会
- 朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書 2
1987.3 島根県教育委員会
- 朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書 3
1990.3 島根県教育委員会



付図 出雲平野の遺跡

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	出雲大社境内遺跡	26	神門寺境内廃寺
2	原山遺跡	27	上塩冶横穴墓群
3	菱根遺跡	28	上塩冶築山古墳
4	石臼古墳	29	築山遺跡
5	山持川川岸遺跡	30	大井谷城跡
6	鳶ヶ巣城跡	31	地藏山古墳
7	大寺古墳	32	半分城跡
8	平林寺山古墳群	33	半分古墳
9	膳棚山古墳群	34	三田谷遺跡
10	荻籽古墓	35	小坂古墳
11	大塚古墳	36	刈山古墳群
12	矢野遺跡	37	山地古墳
13	小山遺跡	38	知井宮多聞院遺跡
14	姫原西遺跡	39	福知寺横穴墓群
15	蔵小路西遺跡	40	小浜山横穴墓群
16	白枝荒神遺跡	41	下古志遺跡
17	斐伊川鉄橋遺跡	42	古志本郷遺跡
18	上長浜貝塚	43	大梶古墳
19	天神遺跡	44	田畑遺跡
20	塚山古墳	45	宝塚古墳
21	今市大念寺古墳	46	妙蓮寺山古墳
22	平家丸城跡	47	放れ山古墳
23	西谷墳墓群	48	浄土寺山城跡
24	角田遺跡	49	地藏堂横穴墓群
25	下沢古墳？	50	栗栖城跡